

■宇都宮太郎 陸軍軍人。最も積極的な大陸政策を唱えた。反長州閥の急先鋒。桂太郎、仙波太郎と共に“陸軍の三太郎”。

うつのみやたろう

遣欧使節・1861= 佐賀鍋島藩士亀川新八の長子に生まれる。

明治維新・1868= 7歳：

初の日刊新聞1870= 9歳：

父が維新で失脚したらしく、亀川家は断絶となり、筑後国柳川城主家老の子を祖とする宇都宮泰源の養子となる。家族離散となるが、離別した姉弟の面倒を見続けたのを始め、家族に愛情を注ぎ、多くの子をもうけることになる。

明治6年政変 1873=12歳：

攻玉社を経て、

琉球処分・1879=18歳：陸軍幼年学校生徒から、

明治14年政変1881=20歳：

新体詩抄・1882=21歳：陸軍士官学校に進学。早くも、*佐賀中心の尊皇思想を持った国士的な生徒の集まり{佐賀佐肩党}をつくって領袖になり、

内閣発足・1885=24歳：士官学校(7期)を首席で卒業し、陸軍歩兵少尉、歩兵第5連隊附を命ぜられる。_長州閥の跋扈に{佐肩党}皆で反発する一方、大アジア主義に共鳴して、荒尾精らとも親交。

帝国大学始・1886=25歳：近衛歩兵第4連隊附となり、

初の対等条約1888=27歳：中尉に進級し、陸軍大学校に入校。

帝国憲法発布1889=28歳：

帝国議会始・1890=29歳：陸軍大学校(6期)を優等で卒業、この年、海軍兵学校を首席で卒業した秋山真之と親友になっている。

大本教・1892=31歳：_参謀本部附となり、

郡司千島探検1893=32歳：大尉に進み、インドに出張。帰国後、参謀本部第二局員となる。

日清戦争始・1894=33歳：_日清戦争では大本営陸軍参謀として、情報収集・分析業務に当たる。

日清戦争終・1895=34歳：台湾の乙未戦争に出征。

白馬会・1896=35歳：参謀本部第三部員に移り、

八幡製鉄始・1897=36歳：

子規句歌革新1898=37歳：少佐に進級する。

Bushidou・1899=38歳：参謀本部には非長州派の俊英が集っていたが、この年、薩派のエース川上操六が死去、

田中正造直訴1901=40歳：_駐イギリス大使館附武官に就任。

ロンドン在のまま、

日比谷公園・1903=42歳：川上操六の後継者田村怡与造も急逝して、長州閥が幅を利かすようになる。中佐、

日露戦争始・1904=43歳：*情報面から、日露戦争で重要な役割を果たし、明石元二郎駐スウェーデン大使館附武官によるロシア弱体化のための工作活動(いわゆる明石工作)を支援。

日露戦争終・1905=44歳：大佐に進級する。

満鉄発足・1906=45歳：帰国し、陸軍大学校幹事となる。のちに自民党左派の大将となる長男徳馬が誕生。_功三級金鵄勲章。

韓国反日暴動1907=46歳：歩兵第1連隊長を経て、

アサキ 創刊・1908=47歳

*参謀本部に復帰し、情報を主管する第2部長に就任。反長州派が期待を寄せる薩派の上原勇作のブレーンとなるとともに、集まる情報への関心から、積極的大陸政策へ歩み出し、

伊藤博文暗殺1909=48歳：少将に進級。

大逆事件判決1911=50歳：_中国で辛亥革命が起きるや、満蒙を南部と分割する「対支那私見」をまとめて、関係者に配布、清朝保護の立場を取った政府方針に反し、密かに三菱財閥の岩崎久弥から資金援助を受けて革命派の支援を行うが、

明治天皇没・1912=51歳：_中華民国政府が樹立、清朝の退場に、“満洲保全”が政治的課題になり、清朝皇族の肅親王、モンゴルの有力なカラチン王を支援して、満蒙での国家成立を図るが(第一次満蒙独立運動)、

大正政変・1913=52歳：陸相現役武官改正に際しての後任人事で策士ぶりを発揮後、_自ら中国に赴いて、革命の状況を視察して、満蒙独立論を否定するに至る。満蒙權益への意見書と日中協約案を作成、公使や在中陸軍関係者に示し、山本権兵衛首相や後藤新平にも送付するが、

第一次大戦始1914=53歳：中將に進級、第7師団長として、*陸軍中央から外され、以後、復帰する日は消えてしまう。

21ヶ条要求・1915=54歳：大札記念章。結局、政府による借款外交は挫折、対中21ヶ条要求の2番目に満蒙問題を提示する。

民本主義・1916=55歳：第4師団長に移り、

本格政党内閣1918=57歳：_朝鮮軍司令官になり、三・一運動に遭遇。事件の処理に追われ、心労から咯血して倒れ、

ハルビン条約・1919=58歳：_大将へ進むものの、健康は回復することなく、

大暴落・1920=59歳：帰国して、軍事参議官となるも、第一線に立つことなかったが、実に、_勲一等瑞宝章、勲一等旭日大綬章、勲一等旭日桐花大綬章を次々受章して、

原敬首相暗殺1921=60歳：

水平社結成・1922=61歳：在職中に_没した。かつての同志・後輩を呼び、日本が将来獲るべき範囲を地図に示して遺言したという。その遺志は、上原派を経て、強烈な尊皇思想と積極的大陸政策をとる陸軍革新グループの荒木貞夫、真崎甚三郎に引き継がれたといえよう。